



インパール作戦と  
ビルマの豎琴

長嶺胃腸科内科外科医院  
長嶺 信夫

1. 夜香木とインパール作戦

念願だったビルマ（ミャンマー）の旅の最終日、ヤンゴン（ラングーン）の民家の庭先で懐かしいあの「夜香木」が咲いていた。

夜香木は、夏の夜、ほのかにジャスミンに似た甘い香りをただよわせる常緑低木で黄白色の小さな星形の花が円錐状の花序で咲く、別名、夜香花、中国名で夜香樹と呼ばれるナス科の植物である。幼少の時以来、庭で咲いていたその香りに魅了されてきた。「初恋の香」でもある。その夜香木がビルマの民家の庭先で咲いていた。

5～6年前だっただろうか、第二次世界大戦中、インパール作戦に従事した日本兵が、戦後ビルマから持ち帰った夜香木を挿し木で増やし、戦死した戦友の家を訪ね歩き、その苗を霊前に供えていることを報じた新聞を見た。当時、すでに戦後50年が経っていた。長い年月が経っても、戦死した戦友を心にとめ、慰霊の旅を続けているその姿に、深く感動したのを憶えている。

インパール作戦は第二次世界大戦で日本軍と戦っていた中国国民党軍を支援するため、米英の連合軍が計画を進めていたインド東北部レドからビルマを経由し、中国の昆明にいたる輸送路、いわゆる援蒋ルートの開設を阻止する目的で日本軍がしかけた作戦で、連合軍の前線補給基地であるインパールを攻略し、占領する作戦であった（写真1）。

日本軍がビルマに侵攻したのは1942年1月のことである。3月に首都ラングーン（ヤンゴン）を制圧、5月にはビルマ全土を支配下にお



写真1. インパール要図、高木俊朗著「抗命」より

いている（写真1）。

当初、ビルマ戦線で優位に立っていた日本軍もインパール作戦開始時には、すでに制空権を米英の連合軍に奪われ、ビルマからインパールに撤退したイギリス軍も万膳の防備体制を整えていた。

インパール作戦は1944年3月8日、チンドウィン河の渡河から開始された。チンドウィン河はビルマの西方を流れる川幅1,000m近い大河で、雨季には濁流と化し、渡河が困難になる大河である。河を渡るとその西方のインド・ビルマ間に2,000mを越すアラカン山系があり、インド東北部の英軍の拠点であるインパールに至るにはチンドウィン河の渡河に加え、このアラカン山系を超えなければならない。アラカン山系は急峻な山々が複雑にかさなり、その間に深い谷や川が入り組んだ地形で、雨期になると、泥流が流れるジャングル地帯である。しかも、熱帯マラリアやアメーバ赤痢が蔓延する地帯といわれていた。

日本軍は東南アジア方面を統括する南方軍（寺内寿一元帥）の下にビルマ方面軍（河辺正三中将）があり、その配下に牟田口廉也中將がひきいる第15軍があった。

第15軍は第31師団（佐藤幸徳中將）、第15師団（山内正文中將）、第33師団（柳田元三中將）で編成されていたのであるが、作戦開始時、

作戦を遂行する十分な輸送手段や補給物資はなく、作戦は困難視され、ビルマ方面軍の河辺中將以外ほとんどの担当参謀がこの無謀な作戦に反対していた。その最大の理由は、国境を越え、インドまで進攻するには、後方からの十分な補給が不可能ということであった。

日本軍はわずか 20 日分の食料しか携行せず、装備や食糧の運搬は、主に人力、牛馬、象に頼っていた。案の定、チンドウィン河の渡河で、半数の牛が溺れ死に、残った牛も急峻な山では役にたたず、その後は、人力で食料や重い装備を背負い、急峻な山道を進まなくてはならな

兵を後方に運んでいたのである。

第 31 師団が、コヒマを攻略したものの、後方支援のとだえた第 15 師団、第 33 師団はインパールにたどり着くことができなかった。5 月になると雨季に入り、糧食尽きた第 31 師団の佐藤師団長はついに 6 月 1 日、第 15 軍司令部に「師団長独断処置スル場合アルヲ承知セラレタシ」と打電し、撤退を開始せざるをえなかった。

撤退を余儀なくされた兵士は、飢餓や傷ついた体でジャングルを通り抜け、ようやくチンドウィン河岸に到達したものの、雨季で濁流と化した河の渡河は困難をきわめ、溺死するものが多く、中には絶望のあまり、自ら濁流に身を投げるものもあったという。

インパール作戦には、日本軍は約 8 万 6 千人が参加し、その中 3 万人が戦死、傷病兵は 4 万人といわれている。糧食がつき、日本軍が撤退する道は「白骨街道」と称されるほど、いたるところに死体が横たわっていた。

インパール作戦に従事した兵士が作戦中くたくたに疲れた体を横たえたジャングルの中で、何処からともなく夜香木の香りがただよってきたのであろう。遠く日本をはなれたビルマの山野で、その香が戦場でのすさんだ心を慰めてくれた。

ビルマ戦線から、かろうじて生還した人達は、悲惨な最期をとげた戦友をいつまでも忘れることなく、戦友の御霊を慰めるため、ビルマの夜香木を戦友の霊前に届け、深い祈りを捧げたのである（写真 3）。



写真 2. NHK 取材班編「責任なき戦場 インパール」の表紙写真

った（写真 2）。

牟田口司令官は天皇誕生日である天長節の 4 月 29 日までのインパール攻略にこだわっていた。第 31 師団は 4 月 5 日にイギリス軍の要衝で、ディマプルとインパールを結ぶ戦略上の重要拠点であるコヒマを攻略したものの、すでに弾薬や食料は底をつき、後方支援のないなか苦戦を続けていた。

これに対し、制空権を握っている連合軍は、インパールに補給物資を空輸しただけでなく、既に日本軍勢力下にあったジャングルさえ切り開き、滑走路を開設し、銃器、弾薬、食料を供給するとともに、小型機を使って、自軍の負傷



写真 3. 古都・バガンの仏塔 遠くインパール方向を望む (2012 年 2 月 10 日撮影)

## 2. ビルマの豎琴

「おーい 水島、おーい 水島、一緒に日本に帰ろう！」

イギリス軍の捕虜になった日本兵の捕虜収容所前で、ビルマ僧の肩にとまったインコが呼びかけるシーン・・・映画「ビルマの豎琴」のひとつこまである。

「ビルマの豎琴」はドイツ文学者の竹山道雄が終戦直後に書いた同名の小説を映画化したものである。筆者も映画を見たことがある。その後、「ビルマの豎琴」は記録フィルムで見たビルマの悲惨な戦場映像とともに筆者の胸のなかで暗い思い出として残っていた。

映画では、イギリス軍に包囲された日本軍が、窮地を脱するため「ビルマの豎琴」の調べにのって「埴生の宿」を合唱するのであるが、いつしか包囲していたイギリス軍からもそれに唱和した歌声が流れてくるシーンは映画を見ている多くの観客に感動を与えたものである。

筆者は物語のなかで、ビルマ僧侶になった水島上等兵が河原で日本兵の遺体を埋葬する場面を忘れることができない。ひとり、黙々と遺体を埋葬する水島上等兵を遠くから見ていたビルマの人達が、ひとり、またひとりと埋葬を手伝い、いつしか多くの村人が手をかしていた。小説ではこの場面の河は「シッタン河」となっているが、インパール作戦で敗残兵が渡河したあの「チンドウィン河」を思い出す。

釈迦涅槃像の近くで作業をしていた日本兵の合唱にあわせ、かすかに「荒城の月」の豎琴の調べが流れてくる。そして、いつしか、ビルマ僧の風貌と「ビルマの豎琴」の調べは、奏でているのは失踪した「水島上等兵」との確信をもつ。

日本への帰還がせまった隊員たちは「きっと水島が来るはずだ」とビルマ僧に呼びかけるように鉄条網の前で、あるいは鉄条網に手をかけて、大声で合唱する。

村人の後方にビルマ僧を見つけた日本兵達が、喜びいさんで「埴生の宿」を合唱するのにあわせ、ビルマ僧は豎琴を激しくかきながら。やがて緩やかな、寂しい「別れの曲」を豎琴で奏で、無言のまま立ち去っていく。

水島上等兵は僧侶として、ビルマの地に残り、戦死した多くの兵士を弔う道を選んだのである。

「ビルマの豎琴」は筆者をして「お釈迦さまの菩提樹を南部戦跡へ」との想いに駆り立てた原点の作品なのである。ビルマで購入した「豎琴」は我が家で大事に保管している（写真4）。

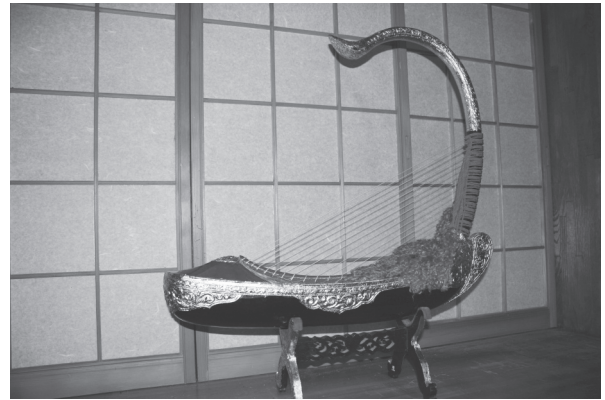


写真4. ビルマの豎琴

### 参考文献

1. NHK 取材班編：責任なき戦場 インパール、角川文庫、1995.
2. 高木俊朗：インパール、文春文庫、1975.
3. 高木俊朗：抗命、文芸春秋、1966.
4. 高木俊朗：全滅、文芸春秋、1968.
5. 竹山道雄：ビルマの豎琴、新潮文庫、1959.



回顧録  
～琉大病院内科創世記～  
医療法人十全会 おおうらクリニック  
大浦 孝

復帰 40 年。琉球政府より沖縄県となって日本国憲法の下に入った。明治維新以来徹底された皇民化政策は沖縄戦とともに終焉し、戦後は、米国によって民主主義が宣言された。しかしながら日本国憲法下の民主主義と戦後沖縄の民主主義とは異質のものとして齟齬（そご）が生じた。沖縄ではあくまでもアメリカ軍占領下の民主主義であった。

復帰 40 年はこの齟齬を修復する期間であった。これは又、日本国憲法を検証する実験でもあった。いかなる憲法の下に沖縄は存在するのであろうか。これは今日的課題でもある。復帰後あらゆる社会基盤が整備され著しい進歩をとげた。同時にあらゆる分野で歪みと格差が顕著になった。

私は戦後この世に生を享けた。沖縄で医療界に身を置いて 30 年余となった。戦後社会の変遷を実体験したし、医療界の統廃合の過程にも当事者として遭遇することになった。特に国策である琉大医学部の設置の過程で医療活動に従事していた。そこでこの節目の年に個人的な体験の一部始終を記録に留めることとした。

### 保健学部の誕生

その頃、琉大病院は那覇市にあった。40 年前の話である。

琉球大学医学部の前身である保健学部が与儀にあり、そこに琉大病院が建てられた。現在の沖縄赤十字病院の敷地である。白亜の十二階建てのビルで那覇の中心地でも目立つ建物であった。周辺には与儀公園があり、市民会館があり、県立那覇病院（現：看護大学）もあった。

新病院の職員は旧県立那覇病院より移籍した「地元勢」を中心として「本土勢」と混成して

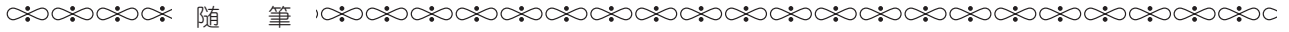
いたので、多種多様な人間模様を織りなした。即ち、新設医大の設立準備段階として母体校があって、そこから教職員が派遣されていた。時の総理大臣佐藤栄作氏は日本医師会長武見太郎氏と協議した。武見太郎氏は母校の慶応大学へ協力を要請した。その結果、慶応大学が中心となり国立大学 4～5 校が参入していた。新潟大学、長崎大学、熊本大学、鹿児島大学、遅れて九州大学、更に私立では久留米大学であった。

教授、助教授、講師等のほとんどの幹部役職には母体校よりの派遣職員が着任していた。いずれの科も少人数で日常の臨床診療を遂行するにも人手不足であった。その後研究棟が増築され動物舎ができ、動物実験も手掛ける様になった。実験設備、器具も徐々に整備されていった。この各大学の混成部隊が紆余曲折を経て新設の医学部の中枢部へ昇格した。その頃、医学部の学生はまだおらず、保健学部であり、保健学科の学生が在籍していた。

日本復帰の際、政府は苦肉の策として、日本では最初にして最後となる保健学部を設置した。その時、保健学部附属病院内科の初代教授は榊屋富一氏であった。榊屋教授は名門九州大学の内科学教授であったが、琉大保健学部の創設を機に移籍した。教授の専門は貧血の病態を中心として、寄生虫学、特にフィラリア症をライフワークとしていた。

榊屋教授は臨床研修にも厳格で、特に教授回診には厳しいものがあり今では伝説となっている。教授回診前日には、晩ともなると検査室が満員となり、血算、検尿、検便等初歩的な検査は自前で行い、検査結果を揃えて翌日の回診に間に合わせた。当日、教授の質問は厳しく緊張の余り小便をチビった者もいたという。当時は研修システムも未整備で、特別のカリキュラムはなく、いわゆるマンツーマンの上下左右の人間関係の中で修練をつんだ。又、学会を中心とした専門医制度もまだ確立していなかった。保健学部には大学院はなく、従って琉球大学には学位の審査権がなかった。即ち学位制度も確立していなかった。

そこで榊屋教授は苦肉の策を講じた。学位取得のため①鹿児島大学医学部へ研究生として籍



をおく。②研究テーマを決め、研究の遂行は琉大の保健学部で仕上げる。③年季がくれば論文を仕上げ鹿大へ提出する。鹿大が審査し学位が授与され、医学博士が誕生した。これで医術・医学の形が伝授されることとなった。大部分の研究テーマは教授の専門である「フィラリア原虫の夜間行動に関する研究」であった。太陽光線と原虫の生態・行動（リズム）を検証するもので、今でも永遠のテーマである。

### 総合医局の時代

昭和52年（1977年）5月、私は卒後6年に帰郷して、その附属病院の第二内科へ奉職した。当時は各科を統合した総合医局があり、別に内科医局、外科医局が隣り合わせて交流していた。後に第一内科、第二内科、第一外科、第二外科と分離独立した。しばらく間をおいて第三内科は発足した。内科は総勢十数名で、北は弘前から南は鹿児島までの各大学を卒業した「留学生」が帰還していた。糖尿病・代謝・内分泌・脂質、循環器、呼吸器・感染症、消化器、血液、腎・膠原病、神経と、内科の全領域を網羅した診療体制であった。

二代目教授三村悟郎先生が主宰され、故佐久本政紀助教授、故普天間弘講師、故佐久本健講師・医局長が指導教官の布陣であった。その頃、新卒の研修医の入局は皆無で、卒後研修システムも未整備であった。それでも2～3年後には初めて3名の新卒者が入局して、賑やかになった。研究棟には研究室、実験室があったが、日常臨床診療が多忙で、基礎的研究の継続には不十分であった。フィールドワークとして平安座島の住民診療、ハワイの沖縄県人の住民検診等のデータが集積され、沖縄県民の血圧、脂質及び循環器疾患等の疾病構造が初めて明らかになった。

私は韓国のソウル大学と提携して韓国人糖尿病患者のHLAをタイピングして日本人との差異を比較した。これは三村教授が主催して沖縄で開催された日本糖尿病学会で発表した。この仕事はソウル大学の金教授、東海大学の辻教授及び三村教授による共同研究であった。更には沖

縄島の膠原病患者のHLAをタイピングして北陸地方の膠原病患者の臨床像との差異を比較検討した。この仕事は三村悟郎教授の御指示により、東海大学医学部移植免疫学辻公美教授の下で、免疫学の基礎と実験方法を修得した後、金沢大学医学部第二内科竹田亮祐教授の御指導により、学位論文としてまとめ、そして母校の金沢大学へ提出し学位を取得した。

その頃の医局の雰囲気はアットホームであった。昼休みには鶴丸弁当を売店で買い、皆で食事をしながら囲碁大会となった。囲碁の猛者が多数おり、他科からも腕に自信のある御仁が来訪して他流試合となった。常時三卓程並び、観戦者は立見席となった。

野外では野球が盛んであった。内科でも正式に野球チームを結成し、全員ユニホームも新調した。基礎体力造りにはじまり、ピッチング、バッティング、守備練習と本番に備えた。土曜日、日曜日には野球場を借り切り、各科対抗の試合が開催された。腕に自信はあるが、不慣れのピッチャーがおり、投球したとたん腕の骨を折ってしまった若者がいた。内野陣は「ガシャ」とかいう骨折の音を皆聞いており、後々まで語り草となった。

屋内外共にアットホームであり、仕事の面でも自ずと診療ネットワークが形成され、内科・外科・他科とスムーズに連絡網が巡り、事が運ばれた。まだ講座制ではなく、いわゆる壁のない各科の医局が寄り集まって診療集団を形成していた。後にこの集団から那覇市立病院の設立に参加したし、その他各自、沖縄の医療界の各分野へ分散していった。更に数年してこの診療集団を元に琉球大学医学部が正式に発足し、那覇市与儀より西原町へ移転、日本で最後発の医学部となった。それから続々と学生が入学し、琉大医学部の新しい歴史の一頁が始まることとなった。現在では名実ともに沖縄医療界の中核となり今日の隆盛に至っている。

**歴史とは客観的事実の羅列ではなく、主観的なエピソード（挿話）の織りなす叙事詩である。**

—西尾幹二「国民の歴史」より—